

「もの」を前部要素とする複合形容詞の認定

— 源氏物語の用例を中心として —

東 辻 保 和

I 本稿の意図

わたしは、先の論文^(注1)で、情意性形容詞（形容動詞を含め、便宜上このように呼ぶ。以下同。）の上についた「もの」（ものさびし・ものかなし等）を、単純に接頭語と決めることが危険であり、その結合したものを、複合語として認定し得るとすれば、その根拠は何か、について、考える要のあることを述べた。また、従来、この結合体の意味を、《ナントナク》と説明されてきていることについても、疑問を提出した。そこで、本稿では、まず、複合語認定について論ずることとし、その複合語の意味、並びに、前部要素である「もの」の意味に関しては、稿を改めて論ずることとする。

^(注2) なお、立論の便宜上、前稿に纏めた分類表の内、陰性的情意を表わす語と結合した場合を主として取り扱い、陽性的情意を表わす語と結合した場合にも、適宜触れて行くことにする。

II 「もの」複合形容詞の認定

「もの」を前部要素とする複合形容詞の認定

結論的に言うると、中古において、「もの」を前部要素とする情意性複合形容詞（「もの」複合形容詞と略称する。）が存在した、と考える。その根拠を、以下五項に亘って述べる。

(1) 〈ものうさ・ものうげなり〉が、源氏物語をはじめ、中古の文献に見られる。このことは、〈ものうし〉なる複合形容詞の存在を予想させるものである。

また、〈ものうし〉と同系語かと考えられるものに、〈ものうがる〉がある。

あやしうひころも物うからせ給て^(注3)（東屋1883）

この語は、構成的には、「もの」と「うがる」の結合体と考えられるが、「うがる」という動詞が、単独に用いられた例は、見当たらず、すべて、〈ものうがる〉〈ひころうがる〉という、複合形式でしか存在していない。とすれば、〈ものうがる〉という複合動詞の存在は、〈ものうし〉なる複合形容詞の存在の可能性に関して、甚だ暗示的であると考えられよう。

本項頭書の語と意味上の同類として、次のような語形式にも、そ

れそれ、複合形容詞の存在を推定し得よう。

ものおもはしき・ものおもはしげなり

ものかなしき・ものかなしげなり

ものさびしき・ものさびしげなり

ものなげかしき・ものなげかしげなり

ものはかなき・ものはかなげなり

ものうらめしげなり

ものこころぼそげなり

ものむつかしげなり

(いずれも源氏物語の用語から)

(2) 用例を挙げて説明する。

おほろけのいのちなかさなりかしとこそおほえはへれなときこえ

いてたまひて物あはれにすこく思ひめくらししほれ給(紅梅1453)

物さひしく心ほそきよをふるは例の事也(稚本1569)

こゝにはほうふくの事経のかさりこまかなる御あつかひを人のき

こゆるにしたかひていとなみ給もいとものはかなくあはれにかゝ

るよその御うしろみながらましかはとみえたり(総角1587)

ひるはざとにおきふしなかくめくらししてくるれば心よりほかにいそ

きまいり給をもならはぬ心ちにいとものうくるしくてまかてさ

せてたまつらむとそおほしをきてける(宿木1773)

わかいらむとするみちはいとくろうほそきにつたかえてはしけり

物心ほそくすゝるなるめをみることも思ふにす行者あひたり(伊

勢物語・九段・天福本)

よろづにおほゆることとおほかれど、いと物騒がしくにぎはは

しきにまぎれつつあり。(蜻蛉日記・中・古典文学大系本)

いとおぼつかなくなりにつければまゐりてと思ひたまふるをいと心

うかりしにこそものうくはづかしうおぼえていとおろかなるにこ

そなりぬべけれど(和泉式部日記・三条西家旧蔵本)

わが身はかよはく物はかなきありさまにて中／＼なる物思ひをそ

し給ふ(桐壺7)

あいなく物はつかしうてわか御かたにとくいてて(少女688)

琴のかむならねとあやししくものはれなる夕かな(少女679)

あなちちにめめしくものくるおしくゐてありきたはかりきこえし

ほと思ひ出るもいとけしからさりける心かな(宿木1711)

——以下省略——

以上の傍線部は、述語や修飾語が、意味的には対等に、並立もし

くは並置されたものばかりである。そして、他方がすべて一単語で

あるところから考えて、(もの——)も、一単語(即ち複合語)と

見るのが適當であらうと思われる。

(3) 前稿^(注4)にも述べたところであるが、「もの」が、《寂シ・恋シ・

悲シ》などの感情を誘発する対象(以下、単に対象と呼ぶ。)として、

特に取り立てられた場合に、次のような表現が見られる。

[甲] いとにほひやかにうつくしげなる人のいたうおもやせていとあは

れと物を思ひしみなから(桐壺8)

風のをとむしのねにつけてものみかなしうおほきるゝに弘徽殿

にはひさしくうへの御つほねにもまうのほり給はす(桐壺17)

つと御かたはらにそひくらしものをいとおそろしと思ひたるさ

まわかう心くるし(夕顔129)

ものをいとくるしうさま／＼におほすにはけそあかりける(夕霧1327)

心うく物をのみおほしへたてたるなむいとつらき(手習2010)

——以下省略——

これらの傍線部は、次のような文型として表わし得るのである。

〔情意性形容詞〕+ガ格語+思フ・思ハル〕

〔ヲ格語+情意性形容詞〕+思フ・思ハル〕

ここで、ガ格語とは、「ものヲ・ものガ」である。

今、へもの——なる複合形容詞があると仮定すれば、

〔ヲ格語+へもの〕+思フ・思ハル〕

なる文型のあることが予想される。次のような例がある。

〔乙〕 数ならぬ身のみ物うく思ほえて待たるまでになりけるかな

(後撰集・巻四) いとつれ／＼になかめかちなれとなにとなき御ありきものうく

おほしなられておほしもたゝれす(葵320) はかなきことをきこえなくさめなきみわらひみまきはしつる人

さへなくよるもちりかましき御丁のうちもかたはらさひしくも

のかなしくおほさる(蓬生532) かへり給を女も物あはれにおもふく(夕1413)

ひさしくとたえ給んことはいとものおそろしかるへくおほえたま

くは(宿木1743)

これら〔乙〕の諸例を、〔甲〕のそれに比べると、「もの」は、対象とし

「もの」を前部要素とする複合形容詞の認定

ては、特に意識せられることなく、後部要素と複合化したものと考
えられるのではあるまいか。

〔4〕 前項〔3〕の〔甲〕と同じく、「もの」が、対象として取り立てられ
ていることが明らかであり、かつ、主格助詞「の」を伴って、従属
節の主語となった場合がある。

〔甲〕 おとゝけしきはみきこえ給事あれと物のつゝましきほとにてとも

かくもあへしらひきこえ給はず(桐壺25) 入かたのひかけさやかにさしたるにかくのご多まさりものゝおも

しろきほとにおなしまひのあしふみおもちよにみえぬさまなり

(紅葉賀287)

なまけやけしとはみたまへとものあはれなるほと、のつれ／＼に
かれもいとたゝにはおほえしとおほすかた心そつきにける(夕霧
1375)

物のあはれなるおりにいまはと思もあはれなる物から(手習2032)

このような例のある他方では、次のように、主格助詞を介しない
例も見受けられる。

〔乙〕 女とをきたひねはものおそろしき心ちすべきを(帚木64)

ゝかてさる物むつかしきすまゐにとしへ給つらむとみたてまつる

(明石476)

すいたる人のつとひところにてものさひしきやうなれと心やれる
さまにてへたまふほとに(曙標604)

やよいの十日のほとなれば空もうら／＼かにて人の心ものひものお

もしろきおりなるに（総合564）

せむさいともこそこのりなくひもとき侍りにけれいとものすさま
しぎとしなるを心やりて時しりかほなるもあはれにこそ（薄雲の

6）

女こあまたものしたまひてさま／＼ものなげかしきおり、／＼おほ
かるにものこりしぬへけれと（若菜下1131）

ことにいてたらんよりもあはれに物こころほそき御けしきはしる
うみえける（御法1387）

つれなくてすくる月日をかそへつゝ物うらめしき、れの春、かな

（竹河1480）

——以下省略——

これら〔乙〕の諸例を、〔甲〕のそれに比較対照する時、後述するように、
〔乙〕の場合は、へもの——を複合語と見るのが適當ではないかと思
われる。尤も、従属節の主語が、常に主格助詞を伴うとは限らない
ことは、言うまでもない。例えば、

すてかたきことおほかるな、かにも（須磨995）

ただ、〔甲〕〔乙〕いずれにしても、「もの」と情意性形容詞によつて、
構成され、連体修飾の機能を有する形式であるという点で、共通性
を有してはいる。しかし、「の」を介するか否かが、全く言語主体
の恣意的なものだと考えるよりは、やはり、表現性の相違として区
別されたものと、考えるのが妥當ではないかと思う。少なくとも、
言語主体の意識には、「もの」を対象として特立する時は、「の」
を介して表現するという、傾向があったとみてよいのではないか。

右の考えの妥当性を裏付けるものとして、程度副詞「いと」の置

かれている位置を、挙げる事が出来る。

〔A〕

つと御かたはらにそひくらしもをいとおそろしと思ひたるさ
まわかう心くるし（夕顔122）

木の葉さそふ風あはたしう吹はらひたるにおまへにさふらふ人
々ものいと心ほそくて（葵314）

宮はものをいとわひしとおほしけるに（賢木350）

夜あけかたちかくなるほとにものいとあはれにおほされて（総合
571）

ものをいとくるしうさま／＼におほすにはけそあかりける（夕霧
1327）

——以下省略——

右の諸例に見られるごとく、「もの」が対象として、特立される
時は、「いと」は、形容詞の直前に来ている。（尤も、これを一般
論として敷衍することは出来ない。例えば、次のように、「いと」
が被修飾形容詞から隔たった位置を、占めることがあるからである。
いと行す多こころほそくうしろめたき有さまに侍に手習2039）
これに対して、「いと」が、「もの」の直前に位置している例が
ある。

〔B〕

かつはいとものくるおしくさまでこゝろとむへき事のさまにも
あらずといみしく思さまし給に（夕顔114）

ありしにまさる物おもひにこと／＼なくてすきゆく秋のす多つか
たいともの心ほそくてなけき給ふ（若紫176）

なを雨風やます神なりしつまらて日ころになりぬいと物わひしき
事かすしらす(明石441)

宮はなやましけにおもほして御返いとものうくしたまへと(絵合
558)

むかしの人もあはれといひけるうらのあさきりへたよりゆくまゝ
にいとものかなしくて入道は心すみはつましくあくかれてななめ
るたり(松風586)

大将もいと物むつかしうたちそひさはき給までえおはしましはな
れす(真木柱961)

——以下省略——

このような例が、源氏物語に約五十例あって、[A]の表現とは、明
らかな対立を示している。

以上のように、「もの」が特立された場合には、「ものいと——」
と表現される傾向があり、「もの」が特立されない場合には、「い
ともの——」と表現されて、「いと」は、へもの——全体を修飾
するものと考えられる。

(5) 最後に、補助的資料として、類聚名義抄(観智院本)を挙げ

ておく。同書によれば、〈懈・勞・瘵・倦・嬾・慵〉に対して、〈モ
ノウシ〉なる訓を与え、また、〈慵・嬾・窳〉に対して、〈モノク
サシ〉なる訓を与えている。

ただし、〈言・語〉に〈モノイフ〉、〈食〉に〈モノクフ〉、〈識〉
に〈モノシル〉、〈裸・襟〉に〈モノオモフ〉、〈艱〉に〈モノカク〉
とあるのなどは、一語とは考えにくいものであるから、前記〈モノ
ウシ〉にしても、〈モノクサシ〉にしても、果して、一語と意識さ
れていたものかどうか、疑問が残る。

(注)

1 「もの」を前項とする連語の検討——中古語の場合——〔論

究日本文学〕・十九号)

2 注1に同じ。

3 源氏物語については、「源氏物語大成校異篇」を底本とした。

巻名下の洋数字は、同書のページを示す。以下同じ。

4 注1に同じ。

(38・8・15)